



学術講演会	
テ ー マ	「覚如上人と存覚上人の神祇観」
開催日時	2018年10月1日(月) 16:45~18:15
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
司 会	杉岡孝紀(龍谷大学農学部教授)
講演者	林智康(龍谷大学名誉教授)
主 催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
共 催	龍谷大学アジア仏教文化研究センター(BARC)グループ1ユニットA「近代日本 仏教と国際社会」
参加人数	23名



会場の様子  
(龍谷大学大宮学舎 西翼2階大会議室)

---

❖ セミナーの概要 ❖

---

2018年10月1日(月)、林智康氏(龍谷大学名誉教授)による講演「覚如上人と存覚上人の神祇観」が行われた。講演では主に、覚如上人・存覚上人と親鸞聖人との神祇観の違い(乖離)について解説がなされた。

林氏は、覚如上人(1270~1351年)には、明らかに本地垂迹説の考え方が見られると述べる。覚如上人の言説からは、名神大社への崇敬の容認、さらには神仏習合的宗教性を基盤とした社会体制との接近や妥協が見られるという。

一方、存覚上人(1290～1373 年)には、『諸神本懐集』『六要鈔』において、権社に崇敬することを勧め、実社に崇敬することを禁止するという「権社—神祇崇敬」「実社—神祇不拝」の立場をとっていることが見て取れるという。また日本を「神国」とする表現も見られる。

親鸞聖人の思想には、覚如上人・存覚上人のような本地垂迹説や神国思想のようなものは見られない。勿論、親鸞聖人においても、日本の神をどのように捉えるかは一つの問題としてあったと思われるが、日本の神の名を直接出すことはなかった。

林氏は、黒田俊雄氏の言説を引きながら、専修念仏は本地垂迹説や神国思想と基本的に相反したものであるにも関わらず、両者を統合しようとする限り、必然的に専修念仏の一向専修(専念)の純粹性が失われてくるのではないかと述べる。そして、そこには親鸞聖人が述べた真仮偽の三重判による論理は見られず、外教邪偽に対する考え方も妥協的になるのだと言う(当日配布レジュメ「真宗における神祇観—覚如・存覚・蓮如を中心として—」『存覚教学の研究』2015 年参照)。



林智康氏

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 唐澤太輔